ボランティアに参加して

井上稔之さん（法3）

初参加だった去年、私の先入観は覆されました。

石巻で出会った人々は「災害に遭い傷ついた人たち」ではなく、心温かいおじいちゃんやおばあちゃん、わんぱくな子どもたちでした。「専大まつり」では先輩から「子どもに注意することも必要だよ」と指摘されるほど思いきり遊び、元気をもらいました。

もっとみんなを笑顔にしたいと参加した今回は、状況とニーズの変化を感じました。仮設住宅では家を建てたりして転居する人が増えているそうで、空き部屋が目につきました。復興に向かっている表れですが、ハード面の復興は進んでも、たな問題点を知りました。

「忘れられていくようで寂しい」というおばあちゃんの声も聞きました。3泊4日のボランティアは有意義ですが、それで終わらせてはいけない。地元の経済が活気づく恐れることの大切さを思い知らされます。いざという時に身を守る知識を広めるため、SKV（専修神田ボランティア）副代表として気を引き締めて活動していきます。

心のケアや孤立防止が大事

住民の心のケアや、新しいコミュニティーでの孤立を防ぐ対策が必要だ、と石巻専修大学の職員の方から話をうかがい、新しい。地元の経済が活気づく恐れることの大切さを思い知らされます。いざという時に身を守る知識を広めるため、SKV（専修神田ボランティア）副代表として気を引き締めて活動していきます。

多くの方が命を落とした石巻では、災害を正しくボランティア活動がこうして実現しました。

しかし、実際に訪ねてみると簡単な作業は一つもありません。雑草取りのような活動も今後は重要です。今回私はTシャツを買い、食堂でご飯を食べましたが、来年は石巻の土地柄を知る時間がもっとあればいいと思います。

富田彩奈さん（経済1）

石巻のボランティア活動に初めて参加、清掃や「専大まつり」を通じ、活動を継続することの大切さを知りました。同時にボランティアを考える足がかりになったと思います。

参加しようと思ったきっかけは、高校時代にさかのぼります。2011年の震災直後、高校を卒業したばかりのカナダの女子学生が日本に渡り東北を訪ね、言葉の壁を越えて被災地の人々を励ました、ということを先生から聞きました。

人に寄り添う気持ちや精神があれば、その土地の言語が話せなくても心は通じ合うはずだ――ずっと心に秘め、やりたいと願っていた被災地での

失敗と戸惑いを次の活動に

一つとっても大変な作業でした。

また、幅広い年齢の人々との接触は、戸惑うことばかり。満足にお話をすることもできませんでした。ほかの先輩や参加者は上手に対応しているのに……。

この体験を所属しているSIV（専修生田ボランティア）の活動に生かしていきたい。そして一回り大きくなって、また来年も石巻を訪ねたいと思っています。

専大生たちは仮設住宅を訪れ、小学生と1年ぶりの再会を喜び合ったり、お年寄りと会話を交わしたりして心を通わせた。また、小学生80人と玉入れゲームなどを楽しんだ。

石巻市教委にSKVが寄付

SKV（専修神田ボランティア）は9月7日、昨年の学園祭「神田鳳祭」での模擬店販売などで得た収益金5万円を、石巻市教育委員会に寄付した。

SKVに所属する学生が「石巻でのボランティア以外にも復興に協力できることはないか」と模索。寄付金集めを企画し出店したワッフルの収益金を全額寄付した。

石巻市役所での贈呈式には、SKV代表の遠藤直哉さん（法3）、会計の日高まいさん（同）と阿藤正道学生部長が境直彦教育長に寄付金を手渡した。

▶ 左から境教育長、遠藤さん、日高さん、阿藤学生部長

専大とともに 神田神保町探索 〈〈36

発行人が編集から配本までフル回転

タウン誌『本の街』

台車で、自転車で。刷り上がった最新号を編集兼発行人の清水勉さんが一人で配本して回る。神保町周辺はもとより麹町、本郷へも。5400部を荷造りするのは妻・杉子さん。遠出で活躍するのは、娘さんの夫から贈られた電動自転車だ。

「子どもを前と後ろに乗せたお母さんが坂道をすいすい上って行くんだよね。抜かれるのはしゃくだけど、しょうがないよ」。若い頃は野球で鍛え、70歳まで市民マラソンで10キロを走っていた健脚の清水さんも80代になった。

毎月10日発行の『本の街』はB6判モノクロ60ページ。120軒あまりの加盟店の店頭で配布されている。文芸誌ふうの表紙をめくると「駿河台のお殿様」「千代田区の神社」…といった連載が並ぶ。小さい活字に書き手の思いがギュッと詰まった読み物の下段は広告枠。古書店や飲食店、画廊、映画館、不動産会社、病院など地域に根を張るさまざまな業種の屋号が目を引く。

「初めの頃は営業に行くと『どこの産だ』ってね。頑固でとっつきにくい人もたまにいたけど、そこをこらえて何回か通うとすごく人が良くて。子の代、孫の代とご縁が続いている加盟店さんもありますね」

清水さんが関わるようになったのは、創刊から数年たった1985年初夏。本腰を入れてやる人を探していると知人に紹介され、引き継いだ。芥川賞候補にもなった長兄（故清水寥人（りょうじん））の出版社を手伝うため、45歳で退職するまでは意外にも国鉄マン。品川駅で信号係をしていたと笑う。随筆で全国1等を取るなど、職場では文芸通で知られる存在だった。

「書いてみたい」「書きたい人がいる」と原稿の持ち込みや紹介でページが埋まる。誤字以外、原稿に手を入れることもしないため、執筆者には心地よく連載が200回続くことも。「せっかく書いてくれたのにスペースがないと言うのは気がひけて」（清水さん）自身が筆を握るのは編集後記ぐらいだが、老いの日常をさらりと織り交ぜ好評だ。

従業員が3人いたこともあったが目下は1人。さいたま市から通う。「私がやめれば終わり。『頑張って続けて』と言ってくれる人が多いからありがたいですよ」

『本の街』に載っている店だから信用できる。載せてもらって息の長い店に――。清水さんの穏やかな物腰と誠実な人柄にひかれ、若い店主の加盟や執筆も増えている。

※月刊文化情報誌『本の街』＝最新の11月号で通巻409号。編集室は東京都千代田区猿楽町2-4-2　小黒ビル1階　☎03・3292・8273

▲ 編集兼発行人の清水さん。誠実な人柄がにじみ出る

▲ 文芸誌ふうの表紙が特徴

▲ 加盟店の店頭で配布